



ASLE-Japan / 文学・環境学会

NEWSLETTER

The Association for the Study of Literature and Environment in Japan

December 15, 2010, No. 29

【役員名簿 (2010-2012)】 (五十音順)

代表: 村上清敏 (金沢大学)

副代表: 喜納育江 (琉球大学)

顧問: 上遠恵子

西村頼男 (阪南大学)

事務局長: 豊里真弓 (札幌大学)

事務局補佐:

高橋綾子 (長岡技術科学大学)

波戸岡景太 (明治大学)

会計: 平塚博子 (敬和学園大学)

林直生 (滋賀大学)

監事: 上岡克己 (高知大学)

ニューズレター編集委員:

木下卓 (愛媛大学)

塩田弘 (広島修道大学)

辻和彦 (近畿大学)

会誌編集委員:

生田省悟 (金沢大学)

高橋龍夫 (専修大学)

中川僚子 (聖心女子大学)

Daniel Bratton (同志社大学)

結城正美 (金沢大学)

コンピューターセンター:

岩政伸治 (白百合女子大学)

山城 新 (琉球大学)

評議員: Bruce Allen (清泉女子大学)

池田志郎 (熊本大学)

石幡直樹 (東北大学)

岩政伸治 (白百合女子大学)

太田雅孝 (大東文化大学)

小谷一明 (新潟県立大学)

茅野佳子 (明星大学)

管啓次郎 (明治大学)

高橋勤 (九州大学)

高橋昌子 (三重大学)

巽孝之 (慶応義塾大学)

田中恒寿 (札幌大学)

横田由理 (広島国際学院大学)

吉田美津 (松山大学)

院生代表: 山本洋平 (立教大学・院)

広報: 三浦笙子 (東京海洋大学(名))

大野美砂 (東京海洋大学)

河野千絵 (日本大学 (非))

研究助成:

岡島成行 (日本環境フォーラム)

高田賢一 (青山学院大学)

乳井昌史 (早稲田大学)

山里勝己 (琉球大学)

野田研一 (立教大学)

村上清敏 (代表) 喜納育江 (副代表)

駄目アマチュアカメラマンのつぶやき

代表 村上 清敏 (金沢大学)

ソウルでは、南大門のカメラ屋街に二度足を運びました。最初は大会当日の午前、生田さん、喜納さん、結城さんもご一緒だったので、横目で眺めるだけにして、二度目はフィールドトリップ終了後の夕刻、ひとりで買う気満々で出掛けました。ところが、垂涎もののカメラが並んでいるのに値札がついておらず、店員と値段の交渉を始めても、日本人が値をつり上げているのか、日本人だからふっかけられているのか、円高のうまみあまり感じられず、そうこうしているうちに、「消費という名の中毒」なる基調講演のタイトルが頭をよぎり、ニコチン、アルコール、カフェイン中毒だけでもう十分ではないかと思に至り、結局、手ぶらで店を離れました。

地元の写真愛好家のグループに入れてもらってから、かれこれ二十年近くが経過しました。「月例会」なるものがあって、会員は毎月五枚以内の写真を持ち寄り、本部の先生による審査と講評を受け、入選十枚、佳作十枚が選定され、入選の一位には10点、十位には1点、佳作には0.5点が与えられ、それを加算して年度賞が決められるという習わしです。毎月百枚～百五十枚集まった写真の中から、「良い写真」を選ばなければならず、それに順位をつけ、しかも、「なぜ良いのか」それなりの説明もしなければならぬのですから、先生のご苦勞も大変なものだと思われま。

ご多分に漏れず、ぼくもいわゆる「ネイチャーフォト」と呼ばれる風景写真から入りました。最初はペンタックス SPII をそのまま使っていたのですが、そのうちにハッセルブラッド 500CM を中古で手に入れ、レンズも80ミリ以外に、50ミリ、150ミリ、250ミリを買い足し、三脚はジッツォーには手が届かずマンフロットで我慢して、撮影会に参加していました。周りの人からは「絵はがきのような綺麗な写真だ」と言われて悦に入っていたのですが、そのうち、これは褒め言葉ではなく、どこにでもある写真だと遠回しに言った言葉であることを知りました。そうすると、どこにもないような風景写真を撮る必要に迫られ、一時

は、得意な早朝撮影に挑んだり、人があまり足を運ばないような場所からの絶景を求めたりもしました。しかし、それがだんだん重荷になってきて、いわゆる「ネイチャーフォト」からは少しずつ遠ざかってしまいました。

そうなると後はいわゆるスナップ写真かヌード写真くらいしか残されていないのですが、こんな片田舎では後者の撮影会はめったにないようですし、残念ながら、個人的にモデルをお願いするだけの機会も勇気も資力もないものですから、いきおい、スナップ写真に向かうしかなくなります。スナップ写真と一口に言っても、その分野は多岐にわたります。能登を中心とした祭りばかりを撮っている人がいて、一度ご一緒さ

せていただいたのですが、祭りが最高潮に達するのはたいていが真夜中で、夜に弱く、酒にも弱いぼくが撮った写真は、そのほとんどがピンぼけであり、一度で懲りてしまいました。それに、シンクロ撮影というフラッシュの微妙な使い方が求められるのですが、それをマスターするのも億劫でした。

また、スナップ写真の鉄則として、「人物は正面から近づいて撮って一人前」という言葉があります。ところが、ご存知のように、「肖像権」なる権利が声高に叫ばれるようになってから、こうした人物写真もなかなか難しくなりました。声を掛けて撮影をお願いすると、強張った笑顔の写真になるか、場合によっては、ピース・サインまでされてしまいます。子どもの写真は、親の許可を得るのが原則となっています。しばらくお話してから、自然な表情で写真を撮らせていただいた幸運な例もありますが、逆に、出会い頭にシャッターを切ったばかりに怒鳴られてしまい、平謝りに謝って許してもらった経験も一度や二度ではありません。

そうこうするうちに、街角や路地裏でのどうということもない写真が多くなってきました。早朝や夕刻の光の具合が良い折に、運良く人や猫や犬が通りかかれば、その後ろ姿を点景として入れるような写真、誰も何も通りかからなければ、光の具合と空気感を活かすような写真が目立つようになってきました。あれだけ口を酸っぱくして「人物は正面から、近づいて」撮るように、はたまた、「性格的に弱いから、村上さんはスナップには向かない」とまで言っていたカメラ屋の親父も、近頃ではどういう風の吹き回しか、「村上さんはみんなと群れず、村上ワールドを持っているから強い」とまで言うようになりました。でも、村上春樹でもあるまいし、そんなワールドの持ち合わせなんぞはありません。何のことはない。風景写真も、ヌード写真も、祭りの写真も駄目だから、最近ではもっぱらミノルタ TC-1 に ISO100 のポジフィルムを詰め、こちらの方は露出をマイナス 0.5 にしたまま、コンタックス T2 には ISO400 のモノクロフィルムを詰めて、馬鹿犬の散歩や学校までの行き帰りに少し遠回りをしたり、会議が早めに終わった夕刻にそれらしい裏路地をうろついたりしているだけです。これからも人物は遠くから後ろ姿で撮り続けるような気がしますし、こうした写真が今のぼくにとっての「ネイチャーフォト」であり、「スナップ写真」であるような気さえしています。

夕刻、茜色の斜光線を浴びて人影が長く伸びている場に居合わせると、あるいは、川縁の銭湯の煙突からたなびく煙が、水面の光を受けて鈍く輝く光景に出くわすと、何とも人恋しくなり、周りの風景が愛おしく感じられて、思わずそっとシャッターを押しています。写真の出来については、現像の仕上がりを待つしかなく、それまでは大傑作が撮れた気分です。無論、結果を見てガッカリすることも多いのですが、失敗もまたフィルム写真の大きな醍醐味と割り切っています。恥ずかしい失敗ばかりの人生を送ってきた身としては、失敗のない写真なんて、面白くもおかしくもないもののように思われるのです。



8月27日から29日の間、新潟県十日町市(まつだいふるさと会館)にて2010年度ASLE-Japan/文学・環境学会全国大会が開催された。作家の林京子氏の基調講演をはじめ、写真家の佐藤一善氏の講演、会員による個別発表、ラウンドテーブル、ワークショップが開催された。活気にあふれた大会の様相を報告していただいた。(編集部)

ASLE-Japan 新潟大会を終えて〈所感と予感〉

副代表 喜納 育江 (琉球大学)

日本各地が異常な猛暑に見舞われたこの夏、新潟県まつだい市で行われた新潟大会も、太陽の熱と光が沖縄にさえ勝るほどに強烈な3日間だった。しかし、そうした異常気象以上に忘れ難い場面の多い有意義な大会となったことも事実である。ベテランから若手まで、キャリア、分野、切り口ともに多様な研究者による口頭発表は刺激的だった。また、作家の林京子さんと写真家の佐藤一善さんが、それぞれの講演会で、心深く染み入るようなお話を聞かせてくださったことも今大会の密度を濃くしてくださった。(佐藤一善さんの講演と写真については、『文学と環境』最新号に随想として拙文を載せていただいたのでご一読いただければと思う。)屋内のみならず屋外のフィールドトリップでは、「森の学校キョロロ」の大脇淳さんのご案内のもと、松之山という風土とそこに暮らす人々が育んできた独特の文化を垣間みる機会を得て、自然と人間の生き方について改めて視野を広げることができた。

今大会の閉会の辞で述べたことと少し重複してしまうが、ここでは大会についての全体的な所感を述べてみたい。今回の新潟大会で私が個人的に感じたのは、ASLE-Japan が学会として模索してきたものが着実に形になってきているということだった。そして、それはASLE-Japanの創設10周年の節目に改めて提起された「アジアからの発信」というテーマとも関わる。ASLE-Japan が、欧米発の「環境主義」や「環境文学」の動きに触発されて英米文学研究者を中心に始まったことは確かである。しかし、世界各地のASLEが同じ題材を同じ方法で研究しているのは、ASLEは欧米中心のグローバルイゼーションを学問という領域で助長するだけの多国籍企業ならぬ多国籍学会になってしまう。ASLEが展開しているグローバルな連帯を強みとしつつ、欧米の後追いに終わることなく、日本のASLEにしかできない研究とはどういうものだろうか。「アジアからの発信」というのは、とりもなおさずASLE-Japanの意義や役割をアジアという地域において模索し、この学会のもつ学問的アイデンティティを再定義する試みだったように思われる。

今回の大会では、「環境」をめぐる研究者の想像力が、英米文学という枠組みを越えて広がりが増していく様子がうかがえた。例えば、エコクリティシズム的分析による日本文学の再読、法制度と他者をめぐる言説の問題、現代言語学による自然現象と言語現象の考察、ネイチャーフォトやサウンドスケープなどの視聴覚芸術をめぐるメディア・表象研究の発表にその一端を見ることができた。これまでに取り上げられなかった日本の書き手を論じようとする姿勢や、学際的な視点と手法を取り入れようとする試みなどを見て、特に若手を中心に、新しい研



究があちこちから芽吹いていること、そして、それらがのおのこの場所で着々と伸びていることを実感した。ASLE-Japan が次世代へ向けて確実に脱皮を重ねていると言っても過言ではないだろう。自分の足下にあるものを、新しい視座で捉え直そうとするこうした姿勢が続けば、これからも次々と日本のASLEならではと云える成果が出てくるのではないかという予感がした。

この大会でも、異なる分野の研究者たちが「環境」という接点で関わり、議論を交わし、みんなの手でひとつひとつ何かを積み重ねていくことの喜びを経験できた。各会員の貢献が大会をこのような盛会へ導いたことは間違いないが、中でも大会運営委員として会場探しから大会運営の細部に至るまで完璧なセッティングをしてくださった新潟在住の小谷一明さん、平塚博子さん、高橋綾子さんには改めてお礼を申し上げたい。これまでの大会と同じように、おかげさまで今大会もまた素晴らしい場所で開催することができた。雲海の広がりを一望できる極上の宿で温泉まで堪能しつつ、美しいブナ林や棚田の風景に心癒されたあの松之山という場所のすばらしさを私たちはずっと忘れないだろう。そして開催期間中の会場運営を支えてくださった院生や若手の会員の皆様にも感謝申し上げたい。次から次へと世代が芽吹く—ASLE-Japan がこれからもそんな勢いを感じさせる学会であり続けられるように、来年の大会も皆でがんばって作っていききたいものである。

基調講演 「私の文学—瞬間の記憶」作家 林京子氏

高橋 綾子 (長岡技術科学大学)

講演は、林氏が発問者である中村邦生氏の質問に答えるという形式で行われた。中村氏は近著であるアンソロジー『生の深みを覗く』(中村邦生編 岩波文庫別冊20)の最終作品として、林氏の短編「空罐」を収めたことを紹介した。基調講演は、中村氏の質問に林氏が返答する形式で行われ、質問は林文学と作家林京子氏の人生において重要な三つの場所、上海、長崎、「トリニティ・サイト」を巡る内容であった。

1. 上海: 林氏が長崎に暮らすまで上海時代について

林氏は14歳、女学校の2年生の2月まで支那大陸上海で暮らした。敗戦の年の1945年2月に長崎の女学校に2年生に編入、3年生で三菱の電気工場に学徒動員された。上海には水上生活者が多く、川の上流では女が米を洗い、下流では子供が用をたす、川はきたないものではないと説明してくれた尼さんの言うことをよく理解できたと振り返った。ある日、5、6体の遺体がロープで船の後ろに縛られ引っ張られていくのを見たとき鮮明に覚えている。これは生と死が違和感なく存在している風景であり、人間も自然も同じであるという、死の原風景を上海での生活で育んだことが語られた。

2. 長崎: 「8月9日」の瞬間を描写するにあたって瞬間の場面性が生まれる理由

『長い時間をかけた人間の経験』で33年間書き終えたもの長い人生の中で「8月9日」の一瞬が折々に顔を出す、その一つ一つを書きだした作品である。被爆者の年月の中にある。「8月9日」は「一瞬」とは何であるかを考えるきっかけとなった。上海時代、乾いた自然の大地で即物的な日本語を培った。これは花鳥風月を愛でる日本で培う日本語とは異なっている。林氏にとって上海的日本語が「8月9



日」を描写するのに必要であった。「8月9日」を描写するとき、個人的な体験ではあるが、私小説では終わらせないよう、自分だけの体験とならないように距離をとり、また、被害者意識をもたないように執筆するようにしていると述べる。例えば『祭りの場』は原爆の「一瞬」の多面性を捉えた作品で、レース編みのピコットのよう、意識のできない時間、裏の時間が存在していると考えている。短編『黄砂』は、日本を襲った黄砂を通して、上海時代に出会ったお清さんとの思い出と彼女の死と日中戦争勃発を描き、太平洋戦争を一貫したものにしかつたために書いた作品であったことに触れた。林氏は加害者意識をもっているのは中国に対してだけであると強く語った。子育てをするようになり、原爆の被害者意識が薄まり、戦争が人類全体の問題であることに気づいた。常に被害者意識と加害者意識が混在して、一様ではないと述べられた。中村氏は「原爆の語り部と自分の作家性」について質問をされた。林氏は、原爆文学は被爆者でなければ書けないとは考えていない、原爆文学は開かれるべきであると述べられた。

3. 「トリニティ・サイト」:『トリニティからトリニティへ』

アメリカニューメキシコのトリニティで撮影した写真をもとに説明がなされた。林氏は1999年10月2日にアメリカに駐在する息子さんを尋ねた折に訪れた。「トリニティ・サイト」を訪れたら、被爆者であることを返上しようと考えていたが、実際には『トリニティからトリニティ』に「記念碑の前に立ったときに私は、正真正銘の被爆をした。」と書かれているように、「再度被爆者にされた」と述べられた。現地で出会った林氏の作品を読んだ男子学生が手紙をくれた。自分に悩みがあったが、林氏の作品によって戦争を人間の問題として考えるようになったと言う。中村氏は『トリニティからトリニティへ』の終盤、筆者が「グランド・ゼロ」に向かい立つ瞬間の描写を朗読した。林氏は、核実験により死んでしまった大地、沈黙の大地を見て、人間は「神」の領域まで入ってしまったと感じたと述べた。「人間はとんでもない領域に入ってしまった。」と絶望の念を表し、言葉を失われた。中村氏は作家として次の作品に期待し、書き続けてほしいと伝えられた。

講演 & 自然体験プログラム

上岡 克己 (高知大学)

8月27日(金)、全国大会初日の講演は、翌日に予定されている自然体験プログラムに備えて地元の棚田写真家、佐藤一善氏が「妻有の棚田」を語るものであった。司会は「森の学校」キョロロの研究員大脇淳氏が務めた。地元出身の佐藤氏だが、写真暦はまだ10年程のこと。しかし郷里の美しい風景に魅せられて、写真を取り続け、写真集を刊行し、今まで東京、大阪、名古屋で個展を開催している。当日の講演はスライド「松之山の四季と暮らし」を使って、自然と地域の人々の暮らしぶりを方言を交えながら語ってゆくものであった。



講演の中心はこの地方に広がる棚田であった。山ばかりのこの地域ではすこしでも収穫をあげるためには、究極の土地利用として山の上まで開墾して田を作る。これが「耕して天にいたる」棚田である。車のない時代、自宅から遠くにある棚田には、山小屋を建て、住み込みで農作業をしなければならなかった。この山小屋が現在でもいくつか残っていることが紹介された。このあたりは日本でも有数の豪雪地帯であるので、秋に田を耕しておくという。雪は4月まで残り、籾殻を撒いて雪解けを促すという。一方夏の乾期の間、田に水をやる方法として随所にため池や用水路が



確保されていた。また小さなダムも造られていた。農地整備で平らな田も増えているが、地すべり多発地帯でもあるので、大きく増やすこともままならず、現在のように多くの棚田が残ることになったという。

棚田における農作業の苦労は絶えないが、畦の草が肥料になり、除草剤の必要がなく、安全な米が収穫できるとのことである。また蕨やぜんまいも取れて、食卓にのぼるとのこと。なお棚田の役割をまとめると、「多種多様な生き物を守り育てる生物多様性保全機能、水を貯えて洪水を防ぐ水源涵養機能、地滑りや土壌浸食を防ぐ土砂災害防止機能、訪れた人の心を癒す保健文化的機能」(パンフレットによる)があるということである。

翌日の自然体験プログラムには約30名が参加し、前日の講演にそっていくつかの棚田を見て回った。最近日本各地で棚田が再評価され、全国棚田100選が選ばれているが、この地域では、「狐塚の棚田」が選ばれている。松之山という狭い地域にこれほど多くの棚田が見られるのは、全国的にも珍しいのではないだろうか。先人たちの苦労とともに、おそらくは棚田保全に関わっていた地域の人たちの努力の賜物であることを知る。当日は猛暑に見舞われ、全員汗だけで日陰を求めながらのツアーとなったが、佐藤氏の語りに皆熱心に耳を傾けていた。

棚田の後、美人林を訪れた時はさすがにほっとした。80年前、木炭にするために全て伐採された後に、ブナの若芽が一斉に発芽し、現在の姿となった。ブナの立ち姿があまりに美しいことから「美人林」と呼ばれるようになったという。最初美人林という名前を聞いた時、松林か白樺林を連想した。というのもブナはどっしりとしてたくましく、節くれだったイメージがあったからだ。でもこのブナ林を見ると「美人」であることがわかった。佐藤氏はブナの木は摂氏15度の地下水を吸い上げているので涼しいという。早速ブナに触れて見ると、そのひんやりとした感触に猛暑を一瞬忘れさせるほどだった。

時間も迫ってきたので、美人林の隣にある「森の学校」キョロロに案内された。「キョロロ」という聞きなれない名は、松之山地区の田植えの季節に南国から渡ってくるアカショウビンという真っ赤なカワセミの鳴き声にちなんで名づけられたもので、ここでは教育、情報発信、体験交流、里山保全、観光、研究を通して地域づくりを目標に掲げている。森の学校では、森脇氏の指導の下、皆が童心に返って網を片手に池を浚っていた。いずれ絶滅危惧種になろうかと思われる水生昆虫に出会い、この地で生き延びることを願わざるを得ない。

なお今回訪れた地は、人の営みが作った豊かな自然と景観が見られる「日本の里山100選」に選定されている。今回初めて訪れて、棚田やブナ林が観光に寄与していることは十分見て取れたが、集落は着実に過疎化が進んでいる。また一年の半分を雪に閉ざされているこの地域が宿命的に持っている問題の解決はまだ見えてこない。3時間半の自然体験プログラムは、研究発表の合間に行われた。日々ストレスの多い現代社会で働く会員にとって、ひとときの休息と安堵感を与えたと思う。

シンポジウム1 「食をめぐる言葉の風景

—宮沢賢治、石牟礼道子、村上春樹を中心に—

横田 由理 (広島国際学院大学)

結城正美氏司会・発題による「シンポジウム1」は発表者の一人である高橋世織氏が都合により第1日目の参加・発表が不可能となったため、第1日目に結城氏ともう一人の発表者である高橋龍夫氏が、第2日目に高橋世織氏が発表されるという形となった。

「村上春樹『パン屋再襲撃』の批評性」と題された高橋龍夫氏の発表は、村上春樹の短編「パン屋襲撃」を取り上げられ、発表からすでに25年を経過しているこの作品が、実は現代社会のグローバリズムと〈食〉の問題の一端を先取りしていることを指摘された。最初の1970年代のパン屋襲撃は、社会体制に帰属することを拒んだ主人公の野性の衝動とも言うべき行動であったが、店の主人から「反ユダヤ的ナショナリストへの急激な精神的変化を遂げた」ワーグナーの音楽を聞かされることで、社会のアウトサイダーとして生きようとしていた主人公が、社会体制に馴致されていく。それから10年後の第2の襲撃は「海底火山」のようなイメージの「特別な飢餓」に襲われた主人公が妻とマクドナルドを襲撃するが、体制側に組み込まれた違和感としての「呪い」にも無自覚となり、飢餓として現れた人間の野性的・原始的な側面も消去された存在として80年代を生きていくことになる。状況論を生み出す社会そのものへの批評的視点として、前述のワーグナーの音楽とマクドナルドを挙げられた。さらに、ジョージ・リッツァの「社会のマクドナルド化」論を中心に考察され、その20世紀の近代合理性・官僚制のパラダイムによって、「パン屋襲撃」においてワーグナー＝ホロコースト＝マクドナルド化という時系列的文脈が成立することを指摘され、マクドナルドのホロコーストまがいの牛肉生産工場の悲惨な内部事情から飼料に関わるアマゾン熱帯雨林の破壊まで、「食」と環境・社会問題の関連を明確に検証された。

結城氏は、1960年代前の「豊食」から60年代から80年代にかけての「飽食」へ、さらに2000年代への「呆食」からその後の「崩食」へという印象的な言葉で、変遷を遂げてきた日本社会の「食」の在り方を紹介された。結城氏の発表の「水俣病わかめといえど春の味覚—『苦海浄土』における食をめぐる知の抗争」では、まず汚染されたわかめを食す水俣の人にとって、それは旬の食べ物であり、「庭」である海からのギフト(贈り物)であるという人と海との絆を指摘され、「栄養」や「毒魚」といった食についての科学的な世界観や「商品としての食べ物」との比較で水俣の「食」を明らかにされた。次に東京の人間の暮らしは「ぐらしか(かわいそう)」と語る老人の暮らしから、魚は海の上で食べるというフード・チェーンの短い関係、魚を天からの賜りものとして自然と折り合いを付けながら漁をしてきたという水俣の漁師たちの「食」と漁の在り方を検証し、汚染された魚を食べ続け、病に冒された子供たちも「宝」として育てる姿勢に見られる暮らしの中には生命への信頼があること、旬の海や山のものを採ってくる豊かな「里海」の風景の中には“food justice”の視点があることも指摘された。

「〈食〉を巡る言語と思想—「フランドン農学校の豚」を読む」と題された高橋世織氏の発表は「宮沢賢治」論は言うに及ばず、「食」の問題と現代社会の諸相などを独自の視点から自由闊達に論を展開され、30分という時間が瞬間に過ぎて行った観のある「高橋ワールド」が聴衆を引き込んで展開されていった。

『食』を巡る3人の発表者のそれぞれに非常に興味深い発表で在ったため、もし3者によるクロスリファレンス的なお互いの発表についての討論があったらどのようなものになったろうかと、また、いつか別の機会にその続きを拝聴したい気がした。

シンポジウム2「交感論の可能性をめぐって」報告

河野 千絵（日本大学（非））

各発表に先立ち、司会の野田研一氏から「交感(correspond)」の概念について導入的な説明が行われた。「交感」とは「人が自然／環境にかかわる(触れる)ことによって、何か(主に非物質的なもの、精神的な意味)を手に入れること」つまり「自然からの贈与」によって生じる心理的なコミュニケーションであると解釈され、そうした「交感」の描写や場面は文学作品に数多く見られる。ツヴェタン・トドロフによればコミュニケーションの形式には「人間対人間」の他にも「人間対世界」、即ち「人間対自然」や「人間対社会集団」などの形が存在する。このように世界認識における「交感」の多様さや重要性が指摘される一方で、例えば「ぼくはこの木に話しかけてみた。・・・しかし、どうやってみても、この木の心と交信することはできない。」(『砂の楽園』)と語るエドワード・アビーのように、「交感」などありえないという意見の人々もいる。以上、「交感」についての定義や肯定的・懐疑的意見の紹介に続き、登壇者四名による発表に入った。

「スタイルとしての「交感」と題された山田悠介氏の報告は、吉本ばななの作品を題材に先行研究を踏まえながらの考察であった。山田氏は吉本が描いている人間と自然との交感には貸与関係が存在することに着目し、その場面描写において実践・発揮されている「反復」と「平行法」の効果や役割を、『アムリタ』や『ひな菊』から例を挙げて論じた。夕焼けについての記述が繰り返されること(反復)によって主人公と夕焼けとの一体化が臨場感を持って描かれている場面(『アムリタ』)、空の状態の変化と語り手の心の動きを平行して叙述すること(平行法)によって交感という対応関係が描き出される場面(『ひな菊』)。これらの作品の分析から、自然と人間との交感には「合一的体験」と「照応的体験」の二種類があり、またそれぞれに様々なレベルの対応関係が存在するのではないかという、今後の研究テーマにもつながる展望的な指摘がなされた。

豊里真弓氏は、自己と他者との境界を形作る自我の問題に着目し、自他の境界という場の意味や、そこで揺れるものや異なるものと出会う「交感」をテーマに、梨木香歩の近作『f植物園の巣穴』を中心に考察を行った。非近代を感知できる手段としての文学の存在意義と可能性。梨木の同著では「生き直しを強制される」語り手で主人公の男性が五感によって過去の記憶を呼び覚まされ、それに伴って彼の様々な心象風景が異界の形で展開する。知覚に強引に導かれる主人公の意識の動きは目まぐるしく、彼は理性のよりどころを求め、さまよう。そしてこうした強制的な「自分を開く」体験の中で主人公は自我の境界を見出し、自分の枠を超えて他者と共にある経験をする。「自他の境界は隔てるものではなく、繋ぐものかもしれない」という指摘は非常に興味深かった。

中川僚子氏はイギリス小説に見られる自然と人間との交感をテーマに、ジェーン・オースティン、D・H・ロレンス、カズオ・イシグロらの作品を参照しつつ、それぞれ三者三様の自然観や自然描写について比較考察を行った。「手なづけられた、人間の生活の延長線上にある自然」とシャーロット・ブロンテに評されたオースティンの「入念に手をかけた、イギリス的自然」。描写対象に距離を置くオースティンとは異なった作風のロレンスは、野生馬や月光に象徴されるような、エネルギーに満ち生命を共振させる肉体的な交感の現場として自然を描出している。一方、カズオ・イシグロは最新作『わたしを離さないで』の中で自然の生命が絶えた、廃棄物が散乱する場所を設定し、そこで果たされるクローン人間と「自然の痕跡」との交感の現象を描いている。

河野哲也氏は「身体とウィルダネス」と題し、都市とウィルダネスとの類似性や都市との「交感」につい

て、日野敬三の論を踏まえつつ、パワーポイントを交えて自身の体験も紹介しながら独自の論を展開した。「都市」が「最初の自然に近づく」のはなぜか、という画期的な問いかけは、河野氏自身のアメリカでの体験に基づくという。人間の都合とは無関係に存在しているものとしてのウィルダネスと都市との類似性の指摘や、定住者の共同体であり人情が存在する「都会」と移動者(移民)の集まりで他者がコントロール不能である無機質な「都市」との対比など、現象学的身体論や生態学的心理学の観点を駆使した、刺激的な考察であった。

総じて、「交感」とはその現象や深度、種類において様々な形式や可能性があること、また冒頭で紹介されたアビーの「交感」への否定的な認識も一つの「交感」ではないかなどと考えさせられ、大変に興味深いシンポジウムであった。

2010 年度全国大会「とっておきの場所トーク」報告

豊里 真弓 (札幌大学)

全国大会初日夕刻、まったく雪国農耕文化村センター内の懇親会会場へ入ったとたん、思わずわあっと声が出た。そこは壁も天井も床も、小学生のとき白と青の絵の具を混ぜて作ったような濃く明るい水色だったのだ。全てのテーブル上面は鏡になっていて、部屋にはまるで空を映した棚田があちこちにあるような“景色”があった。その約1時間後、これまた全方位オレンジ色の女子トイレを出ようとした際になってようやく出口ドアと個室ドアが同じ顔で壁に並んでいることに気付いた私は、「出口がない！」と一瞬ドキッとする羽目になる。そんないたずらっ子のような建物のおかげで目が覚める思いだったところで、今大会の院生組織企画「とっておきの場所トーク」が始まった。



実は、大会受付の際に、2×2の4つのマス目—A(国内・屋内)、B(国内・屋外)、C(海外・屋内)、D(海外・屋外)—が記された紙が配られており、懇親会参加者は、自分の「とっておきの場所」がABCDのどちらにあたるか印をつけて、トーク開始までに提出することになっていた。区分Cは誰もいなかったようで、山本洋平院生代表の司会のもと、区分A(およびAB)、B、Dにマークした順に取って置き場所について語ることになった。

今年度の大会に参加できなかった方々のために、その夜の断片をシェアしよう: 日常やその延長にある、すぐ近くの“とっておき”の場所——実家のお風呂、よく訪れていたファミレスのあるテーブル、東京ディズニーランド裏の堤防、西部ドームの外野席、新潟県胎内市で見る星空や蛍、京都の上賀茂神社と家族での雷鑑賞の夜。今はもう存在しない“とっておき”の場所——ダムの上に沈んだ生まれ故郷と茅葺きの家、祖母がかつて住んでいた沖縄の古い家の間取り。自分にとっての原風景——長野県大鹿村にある廃校を利用した宿泊施設からの山の眺め、雪を冠した三千メートル級の山々の連なり、大林宣彦監督映画作品の舞台となった尾道、北海道苫小牧市の工場の風景と日光の自然湖、富山湾と常願寺川と岩の転がる川岸。過去のある瞬間がたちのぼる場所——長野川や田んぼ周辺の風景

とそこでの昆虫採り、祖父の住んでいた淡路島の伊奘諾神宮とそこでみた蛭、幼い頃今は亡き父と家族でいった沖縄本島瀬良垣の海と潮干狩り。その場所ならではの過ごし方を与えてくれた場所——北海道東部の“熊の王国”での山遊び、伊良部島渡口の浜で弾くサンシン。なぜか心魅かれる場所——アメリカ東部のケープ・コッド、モンゴメリー『青い城』の舞台となるカナダの風景、モルジブと海、アフリカと富士サファリパーク。強烈な存在感を持った場所——スコット・ママディの作品にも登場するデビルズ・マウンテン、ヨセミテ国立公園のスケール、飛行機からみたバイカル湖、ニューメキシコ州アルバカーキでみた地平線に陽が沈む様子。いつかきっとその地へ、という未来のための“とっておき”の場所——アイルランドのフェロー諸島、結婚する人と登りたい富士山。ふと現れた異界——ダイヤモンドダスト舞う冬のカナダの高速道路で飛び込んだ宇宙空間、大会の地まつだいに向かう途中で迷い込んだ山奥の「人間の道ではない」気配。

トーク参加者ひとりひとりの体験や場所への想いを聞きながら、物理的な場所とのつながり方は多様なのだと改めて思っていた。未来や過去という時を超えたつながりもあれば、故郷以外の原風景もある。ある思いやストーリーが詰まっている場所もあれば、突然、場所やできごとと出会ってしまうこともある。水色の部屋のショックとともに様々な場所の語りに覚醒された素敵な夜だった。場所トークを企画・運営した院生組織のみなさんに、あらためて感謝申し上げたい。



2007年に金沢市で開催されたAsle日韓シンポジウムに続き、2010年秋、韓国ソウル市のSungkyunkwan University (成均館大学)にて、第二回Asle日韓シンポジウムが開催された。10月30日から11月1日にわたる三日間の充実したシンポジウムの模様を参加者に報告していただいた。(編集部)

韓日合同シンポジウム報告 (The 2nd ASLE-KOREA and ASLE-JAPAN Joint-Symposium on Literature and Environment)

エコロジーと消費社会の奇妙な関係

塚田 幸光 (関西学院大学)

ボクはウシも食べればブタも食べる。どちらも大好きだ。おっと、トリとサカナも加えねば。これは人並みの欲望でしょ。だが、ここには「食べる」「食べられる」という生／殺の関係がある。ボクがトリなら、「生」は「食」の名のもとに奪われてしまうのだ。

「(肉)食」に対する欲望とは、殺生の上に成り立つ消費の欲望と同義である。＜食べること＞は人間が生きていくために不可欠だが、＜肉を食べる＞ことは、生を享受するため、他者の命を奪うことに他ならない。ボクらの食べ物はどこから作られるのか—ニコラウス・ゲイハルター監督『いのちの食べかた』(2005年)を想起しよう。この静謐で、メカニカルな食の光景とは、晚餐とは無縁なナイトメアではなかったか—ボクの専門は映画なので、本来、このテーマでの発表が自然だったかもしれない。それはさておき、韓日シンポジウムのテーマ「Ecology, Consumption, and Otherness」に接続されるのは、まさに「生／命」をめぐる消費社会の欲望と言えるだろう。

「エコロジーと消費」—この知的カップリングが、シンポに興味深い視座と奥行きを与える。環境の政治学というラディカルズムではなく、環境と消費の結びつきを「文学」する、と言えればいいだろうか。「食」

というキーワードのもと、文学、環境、消費が緩やかに交差するのだ。

大会初日(10月30日)は、3つのSessionが同時にスタート—1: Ecofeminism and Vegetarianism, 2: Globalization and Ecological Problem, 3: Environmental Ethics and Embodiment of Consumption。どれもかなりの盛況。さすが600年の伝統を誇る成均館大学校(ソングングァン大学校)！一般の学生も積極的に参加している様子。ボクは3に参加。ターゲットはRuth Ozekiに関する発表である。詳細を紹介する余裕はないが、やはり文学と消費の関係について気になってしまう。文学研究者が「食の政治学」を論じる意味とは何か。それは、少なくともアクティヴィスト的見解とは異なるはずだ。そして、「食を文学する」のであれば、作家によって異なる微妙な「食／消費への距離感」、或いはその欲望の振幅を見つめる作業こそが重要なのではないか。「消費」という視座を導入することで、文学が社会学になっては本末転倒だろう。つまり、Ozekiが単なるexampleになってしまったら、Ozekiを論じる意味はないわけだ。と、そんなことを考えているうちに懇親会—有機野菜のフルコース、そしてゲストハウス・ラコジェと、最高のもてなしを受け、いい気分。知的モードと旅モードがごっちゃになるのが、国際大会の醍醐味かも。

二日目(31日)。午前のSessionは、4: Food and Environmentalism, 5: Bioregionalism and Consumption, Nature and Coexistence in East and West。午後は、7: Politics of Consumption and Imagination, 8: Culture and Consumption in East Asia, 9: Roundtable Session on Ecology and Consumptionと続く。発表は盛りだくさん。全部紹介できないのがつらいところ。とまれ、「エコロジーと消費」という視座が大会の「枠」となり、基調となっているのは大事だろう。そして、ようやくボクの出番—10: Animals and Ethics of Consumption, 裏番組は11: Reading Session on *The Dwarf and The Lake of Heaven*。久しぶりの文学の発表—ヘミングウェイ、「食／狩り」とコロニアルな欲望について、何とかソフト・ランディング。刹那、開放感と脱力感で眩暈が、、、。夜の懇親会は、再び野菜天国。殺生ではない食の饗宴—辛さで昇天！饗宴は、さらにラコジェでのご乱心へと続く。

三日目(11月1日)は、景福宮のフィールド・トリップで解散。これで終わり？—いやいや、実はここから「エコロジーと消費」の第二幕。午後、Kyobo書店をうろうろしていると、成均館の李さんに遭遇。ボクらを哀れんでくれたのか、市内ガイドを申し出てくれた。小谷さん、李さん、そしてボクが向かった先は、清溪川(チョンゲチョン)。ソウル中心部を流れる人工の川である。この川こそ、今回の大会を総括するに相応しい「場」だろう。というのも、エコロジカル／アーティフィシャルなこの川は、「エコロジーと消費」の関係を逆照射するからだ。

清溪川。今でこそ、ソウル市民の憩いの場であり、清涼さの代名詞であるこの川は、かつて、消費社会のダークサイドそのものだった。李氏朝鮮以来、下水道と同義であり、朝鮮戦争後にはスラムとなる。高速道路建設に伴い、スラム住民は強制移住されるも、川面に陽の光は届かない—道路でドブ川に蓋をしたわけだ。だが、2000年以降、エコロジカルな気運の高まりに、行政が動く(プロジェクト・リーダーは、イ・ミョンバク元市長、後の大統領!)。高速を撤去し、河川を清掃し、水を浄化したのだ。結果、死の川は、オフィス街の清流となる。機械が水流を作り出す一方で、川は都市の温度を下げ、人々の心を癒す。モダナイズされた人工の川は、その悲哀に満ちた歴史と共に、エコロジカルな都市の風景となるのだ。

「エコロジーと消費」—知的な学術の場から、リアルな都市の「場」へ。韓国という近くて遠い国が、少しだけ「近く」なった気がした。次回のジョイント・シンポは台湾。どんな物語が待ち受けているのか、少しだけドキドキする。

金沢からソウルへ ～ 韓日 ASLE 合同シンポジウムあれこれ ～

生田 省悟 (金沢大学)

第2回韓日 ASLE シンポジウムに参加する機会を得ました。秋晴れのソウル。10月30日～11月1日のことです。金沢市で開催された初回から3年を経てようやく実現した第2回目のシンポジウム、素直に喜びとしたいところでもあります。会場は丘陵地に位置し、前身から数えて600年余の歴史を誇るという成均館大学。カササギの「ジェーイ、ジェーイ」とも「ジョーイ、ジョーイ」とも聞こえるけたたましい声が出迎えてくれたのも、韓国にきたことを実感させてくれたひとこまでした。

それにつけても思い出されるのは、金沢開催をめぐるもろもろ。振り返れば、そもそもの企画の前提は、環境文学研究を推進する過程で、東アジアに根をおろした情報を世界に向けて発信すること、そのための持続的なネットワーク構築が必要であることの2点につけていたようです。要するに、この領域の研究深化と水準向上に日韓の研究者が貢献したいとの使命感。その第1歩が2007年8月半ば過ぎの、あの熱い3日間だったわけです。

金沢シンポの「場所、自然、言葉—日韓環境文学の〈いま〉を考える」というテーマ、とりわけ「場所、自然、言葉」なるコンセプトは文字通りに東アジアを強く意識したものでした。実際、シンポのセッションはどれも、日韓の〈いま〉を体現していたはずですが、また、その成果集『「場所」の詩学—環境文学とは何か』を改めてひもとけば、私たちが生きる場所と文化といった視座から新たな地平をきりひらこうとする意図を再確認できるにちがひありません。さらにいえば、今回のシンポジウム冒頭、村上代表の流暢な韓国語を交えた挨拶は、金沢シンポそして夕闇迫る古刹でのポエトリーリーディングの情景に加え、連係と協働の継続性の意義を強く思い起こさせてくれるものでもありました。

さて、事前の情報だと今回は〈食〉が中心らしいとのことでしたが、結局、統一テーマは“Ecology, Consumption, and Otherness”。環境をめぐる重要課題とグローバルな議論の動向を踏まえつつ、境文学研究の可能性をさらに広げて追求するという意欲の表われと評価できましよう。それが3つのセッションの同時進行という形式で、濃密に実践されたわけです。いずれにせよ、山里勝己氏による宮沢賢治とゲーリー・スナイダーをめぐる基調講演をはじめ、研究発表の多くからは〈食〉と文学・想を接続させようとの意欲が自然と伝わってきましたし、〈ナムル〉に関わる歴史的・文化的考察があったりしたのも、韓国ならではの好ましく思われた次第です。

あえて個人的な想いを告白するなら、統一テーマや〈食〉といったことから、ある種の危うさを感じつつシンポジウムに臨んだことは否定できません。食の連鎖や生命の連続性あるいは食のグローバル化が孕む問題域といった次元に終始するのではないか、いわば誰もが何となく納得できそうな安全地帯からの発言になるのではないかと不安があったわけです。しかしながら、セッションの様子をすべて把握してはいないものの、私が聴いた範囲と大部な予稿集から判断する限り、いくつかの局面で、ありきたりの図式を突き抜けようとする試みがみられたのには共感を覚えたものです。さらに、自らの言葉で語ることの価値や、その言葉がどのような立場から発せられるのかを検証する必要性を改めて痛感したりも。それだけでも、韓日シンポに参加できたのは意義深いことでした。

末尾ながら、第2回の韓日 ASLE 合同シンポジウムに際し、韓国側の行き届いた歓待ぶりには心からお礼申し上げます。そして事前の連絡・準備に奔走された ASLE-J 事務局の豊里真弓氏に感謝します。氏のご尽力により、素晴らしいシンポジウムに参加する機会に恵まれたこと、無上の悦びに他なりません。なお、中国、台湾からの参加者をも交えた協議では、2012年、台湾でのシンポジウム開催が合意されたとのこと。金沢シンポから始まった東アジアの連係ネットワークが着実に広がってゆくことを切に

願うばかりです。

(シンポジウムの最中、何の脈絡もなく『ガルガンチュア』や辺見庸の『もの食う人びと』を読み直したい衝動に襲われました。8月の全国大会で中村邦生氏のいわれた「食うことのおぞましさ」が耳にこびりついてたためか、生きることの猥雑さぬきで環境は語れないとの偏見があるためか。で、金沢に戻って最初に手にしたのが『孤独のグルメ』[原作・久住昌之、作画・谷口ジロー]。いやはや…)

現代ネイチャーライターの横顔(14)

小説家としてのリック・バス

塩田 弘 (広島修道大学)

文学・環境学会編『たのしく読めるネイチャーライティング』にも二作品が紹介され、ネイチャーライターとして確固とした地位を築いているリック・バス(Rick Bass, 1958-)であるが、小説家としての側面は日本ではあまり紹介されていない。単行本として翻訳されているバスの二作品は、いずれもエッセイ集、またはノンフィクションであり、その内容はアウトドアや環境保護に関するものになっている。最初に翻訳された作品はエッセイ集『心に野性を』(*Wild to the Heart*, 1987)であり、山歩きやカヌーやフィッシングなど、大自然にあこがれて休暇のたびにアウトドアライフを楽しむ様子が綴られている。代表作『帰ってきたオオカミ』(*The Ninemile Wolves*, 1992)は、モンタナに60年ぶりに現れたオオカミの習性と生態を野生動物保護の視点から観察し、政治的・科学的な問題を取り上げた自然誌であり、「実践的な」ネイチャーライティングとして高い評価を得ている。

バスの小説家としてのデビューは、最初のエッセイ集を出版した四年後の1989年で、それ以降は短編作家としての活躍がめざましく、多くの雑誌に短編を掲載し人気を得ている。二度にわたるO・ヘンリー賞受賞をはじめ、複数の文学賞を受賞しているほか、毎年出版される*Best American Short Stories*にも何度も作品が掲載されている。柴田元幸はバスの作家としての側面を「自由奔放な小説を書く野蛮な作家」と評価し、二篇の短編、「見張り」(“The Watch”)と「準備、ほぼ完了」(“Ready, Almost Ready”)を翻訳して自らが編纂したアンソロジー『世界の肌ざわり』

(白水社, 1993)、『いずれは死ぬ身』(河出書房新社, 2009)に、それぞれ収録している。

バスは短編以外にも、中編・長編を幅広く手がけている。1994年に発表した*Platte River*は三つの物語を収録した中編集で、作者が移り住んだモンタナの大自然などを舞台とした「大人の」人間劇が展開する。この中編集では、二つの物語の冒頭にソローの日記の引用があることも印象的である。初の長編であり、十年以上にわたって書き続けられた、*Where the Sea Used to Be*(1998)は、石油王と若い地質技師との物語で、作者自身が大学で地質学を学び石油資源調査の仕事に従事した体験が下敷きとなっている。

バスの小説には、彼が少年時代に過ごしたアメリカの南部(テキサス州フォートワース)を舞台としたものも多い。*Atlantic Fiction 2009*では、Paul Theroux、Margaret Atwood、Tim O’ Brienといった、錚錚たる作家とともにバスの作品が掲載され、彼がアメリカを代表する作家の一人として認識されていることを示しているが、ここに収録された“Fish Story”はまさしく彼の少年時代のはかない思い出を基に書かれたものである。この短編は、巨大ナマズの世話を任された少年と、大人たちによって殺されるナマズをめぐる物語である。ナマズがピストルで撃たれて切り捌かれていく過程を見守る少年の気持ちと、そしてナマズの腹から出てきた腕時計を今でも持ち続ける主人公の気持ちは、自然を舞台として少年が大人の男になるための通過儀礼的な葛藤を含んでいる。

バスはこれまでに24冊の本を出版している多作の作家で、近年は一年に一作の割合で新作を発表している。最新作は2010年に発表した小説、*Nashville Chrome*であり、すでに2011年秋には*The Black Rhinos of Namibia*の出版も決まっている。現在、最も精力的な創作を続けるネイチャーライターの一人として、バスは注目すべき人物であろう。

書誌情報 (16 ページ「寄贈図書」の項目も参照のこと)

- 亀井俊介監修『マーク・トウェイン文学/文化事典』彩流社, 2010.
日本近代文学会関西支部編『海を越えた文学—日韓を軸として』和泉書院, 2010.
松本昇他編『バード・イメージ—鳥のアメリカ文学』金星堂, 2010.
結城正美『水の音の記憶—エコクリティシズムの試み』水声社, 2010.
ソロー、ヘンリー『コンコード川とメリマック川の一週間』山口晃訳, 而立書房, 2010.
マタソン、スティーブ『アメリカ文学必須用語辞典』村上淳彦/福士久夫監訳, 松柏社, 2010.
ワーズワス、ウィリアム『湖水地方案内』小田友弥訳, 法政大学出版局, 2010.
Huggan, Graham and Helen Tiffin. *Postcolonial Ecocriticism: Literature, Animals, Environment*.
London: Routledge, 2010.

広報からのお知らせ

2010年10月20日に、ASLE-J 書誌情報更新版のアップロードが完了いたしました。アドレスは以下のとおりです。ご協力下さいました皆様、ありがとうございます。

<http://www.asle-japan.org/pdf/aslej-bibliography2.pdf>

今後も定期的に情報の更新をまいりますので、会員の皆様のご出版やご活動等の情報を広報委員の大野美砂 (misa@kaiyodai.ac.jp) までお送り下さい。次回の更新は来春を予定いたしております。具体的な締め切りなどにつきましては改めてご案内をさせていただきますが、情報のご連絡はいつでもお待ちしております。これまで情報をお寄せいただかなかった方々からのご連絡もお待ちしております。どうぞよろしくお願いいたします。

広報委員 三浦笙子、河野千絵、大野美砂

院生組織の活動

院生組織では、院生・非常勤講師の会員を中心にウェブ上での読書会や環境批評用語集の準備、大会でのワークショップの企画などを進めております。ご興味をもたれた方、参加を希望される方は、山本洋平 (yoheiyam@yahoo.co.jp) までご連絡ください。

会誌編集委員会からのお詫びとお願い

『文学と環境』第13号の60ページ、次号(14号)応募原稿送付先の案内ですが、提出期限が誤って記載されています。不手際をお詫びするとともに、以下の通り、訂正させていただきます。

(誤) 応募原稿送付先 (投稿締切日 2011年3月11日)

↓

(正) 応募原稿送付先 (投稿締切日 2011年3月1日)

* 訂正シールも同封しますので、該当箇所に貼りつけてください。

なお、送付先に変更はありません。会員におかれましては、ふるってご投稿いただきますよう、お願い申し上げます。



<2010年度 ASLE-Japan/文学・環境学会全国大会総会および第1回役員会のご報告>

2010年8月28日(土、18:10~18:40)に、新潟県十日町市のまつだいふるさと会館2階常春ホール(十日町市松代3816番地1)にて、2010年度総会が開かれました。まず、審議事項として、2009年度会計および監査報告、2010年度予算案、役員改選案、役員年度および会計年度、次年度全国大会案、会則第7条、8条修正案、投稿規程改正案について担当役員より説明があり、審議を経て了承されました。続いて、2009年度活動内容、会誌・ニューズレターの発行、現会員数(174名)、分科会および院生組織の活動、第2回 ASLE 韓日シンポジウムの進捗状況、ASLE-Japan ウェブサイトのリニューアルおよび広報活動(会員書誌情報のHP上での公開)についての報告がありました。なお、新役員体制での第1回役員会において、次年度全国大会案についての変更が審議を経て了承されました。

<2011年度 ASLE-Japan/文学・環境学会全国大会を明治大学生田キャンパスにて開催します>

上記の本年度総会では、来年度全国大会の開催予定場所として清泉女子大学が挙がっていましたが、その後、清泉女子大学校舎に夏期休暇中工事の予定があることが判明しました。2010年度第1回役員会(稟議)にて再審議の結果、来年度の全国大会は、明治大学生田校舎にて開催することとし、管啓次郎評議員に2011年度全国大会実行委員長をお願いすることとなりました。なお、開催日が確定するのは、来年一月以降となります。

とき:2011年8月26~28日(第一候補)または同8月19~21日(第二候補)、同9月2~4日(第三候補)のいずれかの予定

ところ:明治大学生田キャンパス(〒214-8571 神奈川県川崎市多摩区東三田1-1-1)

催しの予定:キャンパス近くの生田緑地散策、岡本太郎美術館・日本民家園の見学ほか

※開催日程および催しの企画詳細については、確定次第、会員メーリングリストや ASLE-Japan ホームページにてお知らせいたします。

研究発表、ラウンドテーブル、シンポジウムを募集します。タイトル、発表要旨(800字程度)、連絡先を大会実行委員の管啓次郎(明治大学)までお送りください。

送付先:〒214-8571 神奈川県川崎市多摩区東三田1-1-1 明治大学大学院理工学研究科新領域創造専攻デジタルコンテンツ系 管啓次郎研究室

締切:2011年4月25日(月)

<会費納入のお願い>

2010年6月発行の Newsletter に添えて、会費納入のお願いをいたしました。会費未納の方は、至急、下記郵便口座へお振込みください。(一般5,000円、学生2,000円)

口座番号 01300-0-93821

加入者名 文学環境学会

(フリガナ:ブンガクカンキョウガッカイ)

<寄贈図書>

次の図書を学会に寄贈していただきました。お読みになりたい方にはお貸ししますので、事務局までご連絡ください。なお、送料はご負担ください。

- ・エコクリティシズム研究会『エコクリティシズム・レビュー』No.3、2010年。
- ・杉野健太郎編『アメリカ文化入門』三修社、2010年。
- ・下楠昌哉編『イギリス文化入門』三修社、2010年。
- ・林京子著『希望』講談社、2005年。
- ・日本アメリカ文学会関西支部編『関西アメリカ文学』47号、2010年。

<2010年度会員名簿>

2010年度会員名簿が完成しました。隔年で作成しておりますので、次回は2012年度の発行となります。

<同封の訂正シールについて>

本年度の会誌『文学と環境』第13号の60ページ、次号(14号)応募原稿送付先の案内の中で、投稿締切日が誤って記載されています。正しくは、「応募原稿送付先(投稿締切日 2011年3月1日)」(下線部が訂正部分)です。去る10月に会員MLにてご連絡いたしましたとおり、訂正シールを同封いたしますので、お手元の会誌の該当箇所に貼り付けてください。なお、応募原稿送付先に変更はありません。会員のみなさまにおかれましては、ふるってご投稿いただきますよう、お願い申し上げます。

<会誌執筆者情報の訂正について>

本年度の会誌『文学と環境』第13号(2010年)にご寄稿くださいました上地直美様より、執筆者所属先の訂正依頼がありました。会誌13ページ「インディアナ大学(ブルーミントン校)・院」とありますが、上地様は大学院生ではなく教員(Associate Faculty)ということですので、「インディアナ大学」が正確な表記となります。会員のみなさまには、お手数をお掛けしますが、お手元の会誌の該当箇所の訂正をお願いいたします。なお、上地様には一般会員として執筆分担金もお支払いいただいておりますこと、上地様ご本人のご希望により明記させていただきます。

【編集後記】

今号では全国大会(新潟県十日町)と日韓大会の報告を併載したため、発行時期が遅くなってしまいました。代表・副代表はじめ、ふたつの大会の臨場感あふれる原稿をお寄せくださった皆様に感謝し、お礼申し上げます。会員各位の自発的な投稿によってこのNewsletterは支えられております。次号からもよろしくお願いいたします。(TK)

*写真(p.4-p.6.)は、山本洋平氏にご提供いただきました。



【発行】

代表 村上清敏
事務局: 札幌大学 豊里真弓
〒062-8520
札幌市豊平区西岡3条7丁目3番1号
Tel/Fax: 011-852-9617 (直通)
E-mail: toyosato-m@sapporo-u.ac.jp

【編集】

編集代表 木下卓
〒790-8577 愛媛県松山市文京町3番
愛媛大学法文学部・人文学科
E-mail: kinoshita.takashi.me@ll.ehime-u.ac.jp